85

古戯都十全

85歳まで生きてどうするの？　と君が聞いたから、君の悲観を汲んで私は85歳になることにした。仕事を放り出して鍬を持ち、テレビの前でいびきをかき、浮かんでは消える記憶のあれこれをコラージュして詩作に耽る。85歳も悪くない。85歳は快適だ。私は本当に85歳になったら、君が生きていようが死んでいようが君に会いに行くよ。君の悲観で生きてくることができた私の人生を、君にそっくりそのまま渡したいのだ。もし君が生きていればそれは詩になり、死んでいれば碑文となるだろう。

そんな陳腐な時計を買ってどうするの？　と君が言ったから、私はこの時計を85歳になるまで使うことに決めた。時々止まるこの時計の針を、私は毎朝10時に一周させる。私が85歳になるまで使えるように、針の調子を健康に保つのだ。この時計の時針と秒針は近づくとよく止まる。君と私の関係みたいだ。もしかしたら針が止まっているとき、君は私の知らない人と愛の秘儀の最中だろうか？　君と私がたとえ85歳になる年まで生きられなくても、この時計の針は変わらず走り続けているだろう。そして時針と秒針は近づくたびに止まり、愛し合うことをしばしやめるのだ。

もう人を愛することに疲れてしまったの、といつか君が話していたから、私は85歳まで生きて誰かを愛し続けることに決めた。相手は君かもしれないし、まだ見も知らぬ人かもしれない。生きている人かもしれないし死んだ人かもしれない。君が心をすり減らしたのは私のせいだといって自惚れるつもりはない。でもすり減った心を使役してまで誰かを愛してしまう境地には、85歳まで生きなければたどり着けない気がするのは私だけかい？　85歳になっても君を愛せるように、さんざん恋愛をしてすり減らした心をいつも保っておくよ。そして85歳の年になってもし君が生きていたら、空いている私の心のスペースにそっくりそのまま君の人生を譲り渡してほしい。もし私が生きていたらそれをもとに詩作をするけど、死んでいたら碑文にさせてもらうよ。

近頃ようやく自分を愛せるようになったの、と最後に会ったとき君が言ったから、私はそれ以後の人生において自分を愛せた瞬間をサンプリングすることにした。君を愛していたとき、私は自分自身をも愛していたような気がするけど、今となっては当時のことはわからない。誰かを愛することで自らを労われるなら、最後に会ったとき君は誰かを深く愛していたのかな？　そして君はいつか自分を愛せるようになるとわかっていたから、85年も人生はいらないと思ったのかもしれないね。もし人生が自分を愛せるように

なるまでの長い試練だとしても、誰かを愛しているときに自分を愛しているであろうことに気づかない私なら耐えられる。そしていつの日かまた君を愛せるようになるまで、サンプリングした瞬間は束にして記憶の箱にしまっておくよ。君がもし85歳まで生きていたら、それを開けに来てほしい。私の記憶を見た君が、より君自身を愛することができるように。